

# 小学生1万人の調査で判明！カブトムシの目撃は減少傾向に！

## ～子ども「いきいき」生き物調査2023 調査結果～

環境科学研究所では、横浜市立小学校 340 校の小学生を対象に、家や学校の近くで見つけた生き物を報告してもらって調査を実施しています。2023（令和5）年は、160 校、10,061 人の小学生が回答し、**里地里山的環境を指標するカブトムシの確認率が減少傾向であること、横浜市内で局所的に見られる外来種であるハッカチョウの分布が拡大傾向にあること**など、今後の生物多様性保全に資する貴重な情報を得ることができました。本調査は2013年から実施しており、今回で11年目10度目\*、参加児童数はのべ11万人を超えました。

※2020年はコロナ禍のため本調査は実施しませんでした

### 1 調査の目的

- 地域の自然や生き物への関心を高めてもらうこと
- 生物多様性保全に資する基礎データを取得すること

### 2 調査方法

2023年の夏休み前に横浜市立小学校340校の5年生29,397人（2023年5月1日現在）に調査票（右図）を配布し、過去1年間に「家や学校の近く」で見つたり、鳴き声を聞いたりした生き物に対して〇をつけてもらいました。

### 3 調査対象とした生き物

調査対象とした9種類の生き物は分類（同定）のしやすさに配慮しながら、市内の自然環境を特徴づけるもの、減少又は増加傾向にあるものなどを選定し、年ごとに変えてローテーションさせています。



調査票

### 4 調査結果

学校ごとに、対象の生き物を見つけた人の割合（以下、確認率）を集計し、その情報をもとに市内全域における確認率の高低を色の濃淡で示しました。2021年、2022年はコロナ禍による行動自粛が生き物とのふれあいの機会減少につながっている可能性が示唆されていました。今回調査した9種類の生き物のうち、ふきのとう、ハッカチョウ、サワガニの確認率が2019年以前より上がり、コロナ禍前に戻りつつあります。一方で、毎年あるいは2年に1回の頻度で調査を実施しているツバメの巣やカブトムシの確認率は、コロナ禍前と比べやや低い状態が続いています。

本調査は、毎年1万人以上の児童が参加することにより、横浜の生物多様性を知る上で、非常に精度の高い調査結果が得られています。結果の詳細は、報告書として全ての横浜市立小学校へ配布するとともに、下記 URL または二次元コードからアクセスできる横浜市環境科学研究所 Web ページにて公開しています。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/kankyohozen/kansoku/science/naiyou/tayosei/ikiiki.html>



裏面あり

### 【カブトムシ：横浜市全体の確認率 62%】

市全体の確認率は 2013 年以降、徐々に減少傾向にあります。特に前回 2021 年の低下は、コロナ禍による行動自粛が影響したものと思われます。今回は 62%とやや持ち直したものの、依然として低めでした。みどりの多い市西部の確認率が高く、東部の臨海都市部で低い傾向は、これまでと同様です。近年のナラ枯れの拡大により餌となる樹液が出ている木が増え、カブトムシは見つけやすくなっている可能性もありますが、暑い夏には成虫が少ないことなどが報告されており、猛暑であった今回は少なくともその影響を受けたものと思われます。

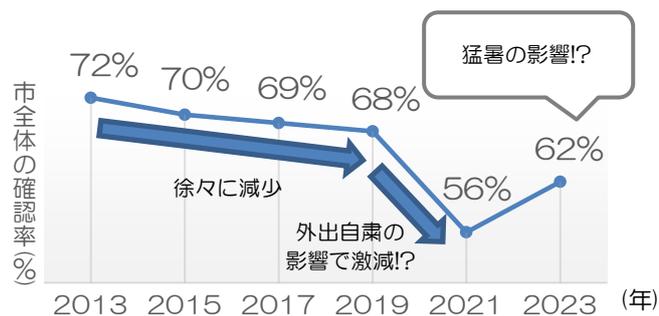
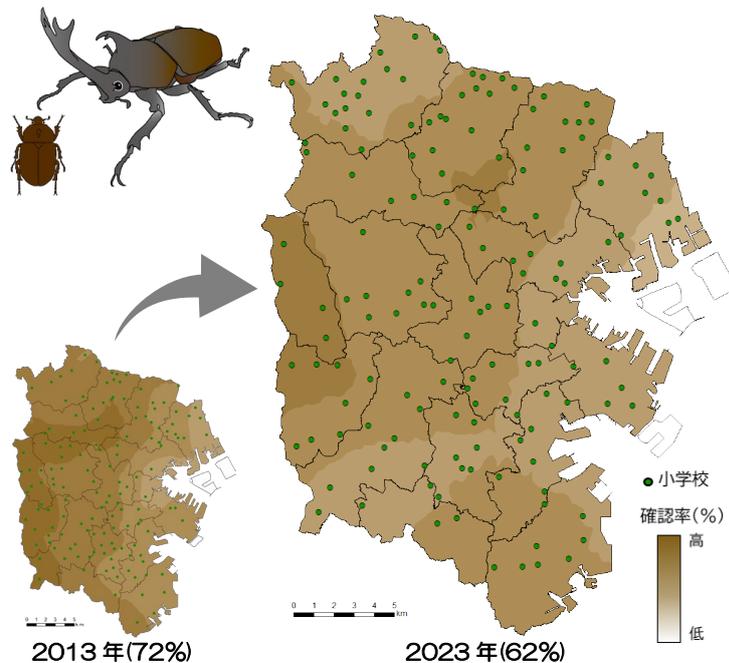


図 カブトムシの確認率の経年変化

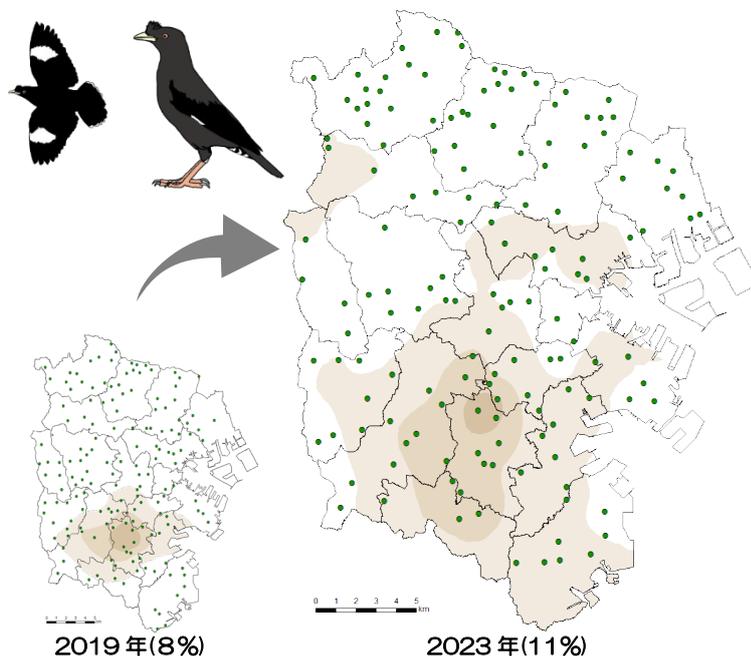


注) 色の濃淡は、小学校ごとの確認率をもとに統計的に計算、作図したものです。一部のふ頭などは解析対象外としました。  
注) 作図にあたっては、GISソフトを用い、1校あたりの回答数が10人以上であった149校のデータを使用しました。

### 【ハッカチョウ：横浜市全体の確認率 11%】

ハッカチョウは港南区周辺など、市内では非常に限られた地域に定着した外来種です。定着した地域では集団で見られることもあります。

市内では 1976 年に初めて見つかри、45 年以上が経過していますが、市内全域には広がっておらず、生息地の拡大は緩やかであったようです。しかし、2019 年から今回にかけての結果は、市全体の確認率が 8% から 11% へと統計的に有意に増加し、生息範囲も広がりました。2021 年には北部の都筑区でも目撃情報があり、横浜では生息地拡大傾向にあると思われます。



小学校、確認率に関する凡例および注意事項は、カブトムシと同じです。

## 5 その他

確認率は観察場所へのアクセスのしやすさなど、さまざまな要因により変動し、必ずしも生き物の生息密度を表すものではありません。調査は長期的な視点での解析・考察が重要であり、来年以降も対象とする生き物の種類を変えながら継続実施する予定です。



**横浜で初めて行う  
万国博覧会**  
2027年3月19日～  
9月26日開催

お問い合わせ先

環境創造局環境科学研究所長 古谷 智仁 Tel 045-453-2550